淨土宗聖典

第一卷

淨土宗

序

浄土門主　中村康隆

この度、浄土宗教学局の指導の下に設立された浄土宗聖典刊行委員会並びに浄土宗聖典編集委員会の諸師の多年に亘る努力によって、新たに『浄土宗聖典』全六巻（予定）の刊行が進推せられて、漸くその第一巻として『浄土三部経』と『往生論』とが担当諸師の厳密な校訂推敲の下に出版の運びとなられたとのこと、まことに宗幸の至りと慶賀の念を禁じ得ません。

殊にこの三経一論こそは浄土教信仰の根幹であり精髄であります。宗義の肝要も信仰体験の枢要もすべてこの一巻に凝集されております。例えば如来の眞身が大慈悲心そのものであり、その身量の無辺とはこの大宇宙の一切が如来の大願業力の現われであり衆生救済の施設手段なることが明らかにされているのであります。

然るにこの貴むべき経典の正しい転読、音読にしろ訓読にしろ、平仄や清濁・拍子などが時處人により差異があって行われている現状を匡そうと永年諸伝承を照合校訂されたその精華がこの刊本で示されたことは深謝に堪えないところです。殊に小衲のように戦災で旧蔵の大雲点本など一切を焼失した後に師跡を継いだものには、『浄土宗法要集』と、八百谷孝保師の『浄土礼誦法』で日常には事欠かぬとは申せ、日々拝読すべき聖典の音訓読等の正しい伝承の基本が、今回の『聖典』集の刊行によって漸く示されるに至ったことを、心から慶び且つ感謝しております。

どうぞこの第一巻に引き続いて全巻が担当諸師の真剣な考究に基いて後世に範を示されるよう、心から祈念する次第です。蕪辞ながら一言以て序言と致します。

合掌

まえがき

聖典が生む念仏聖人

浄土宗宗務総長　成田有恒

待望久しかった『浄土宗聖典』が発刊の運びに至りました。宗門をあげての悦びであります。

わが念仏聖人――

これは法然上人のお言葉の中でしばしば登場してくる〝呼びかけ〟であります。私は、法然門下を総称する普通名詞かと読み流してきました。ところが、さまざまな傍証でかためてみると、普通名詞ではなく特定の念仏者を呼称する固有名詞だったのではないか、と考えられるのです。特定の念仏者たちとは、現代でいう浄土宗団の教師資格を有する僧侶を指しています。

傍証の第一は『七箇条起請文』で、法然上人はここで明確に教団宗侶としての生きる道を教えていらっしゃいます。また攻撃してきた興福寺奏状も「新宗ヲ立ツルノ失」を大きくかかげております。

さらには念仏聖人なる〝宗門人〟の存在が考えられたとき、はじめて一枚起請文の「尼入道の無智のともがらに同じうして」の意味も差別枠を脱して鮮明になるのではありますまいか。

『禅勝房伝説の詞』にある念仏者の妻帯観――「ひじりで申されずば、めをまうけて申すべし。妻をまうけて申されずば、ひじりにて申すべし」とありますが、この聖（ヒジリ）も一般的な〝私僧〟ではなく、法然義を信奉し、それなりの手順手続を経て資格を得た念仏聖人たちだったのでありましょう。

では、その手順手続とはどんな内容であったか。詳細は不明にしても『選択本願念仏集』を附法

されたかどうかが有資格者の基準だったように思われます。入門未だ日の浅かった親鸞が附法された悦びを喧伝しまわった姿が、よくこれを物語るでしょう。

その親鸞への『選択集』の附法ですが、法然上人手ずからお渡しになったとも思われず、おそらく高弟の誰かの分を書写したのではないでしょうか。印刷技術も未開な当時としては〝書写〟だけが貴重な流通手段だったはずです。

浄土宗三祖良忠上人は、この『選択集』附法のために出雲から九州の鎮西上人のもとへ出かけているのです。

こうして『選択本願念仏集』を軸に「三経一論」から始まり浄土聖典の体系が確立されたからこそ、八百年を超える歴史の彼方で元祖上人像がなお脈々と感得できるのであります。また歴代の宗侶は一人一人が「念仏聖人」の誇りと自覚のもとで称名念仏を世にひろめて来られたのでした。

聖典編纂の詳細については高橋弘次先生の文章にゆずります。お読み頂いてもわかるように戦後年代の大半と、宗門学究学人が叡智とエネルギーを傾けての結晶がこの聖典であります。

浄土宗の全寺院がこの『聖典』を備え、僧侶、檀徒ともどもが一体となってその内容を学び取り、一人でも多くの「念仏聖人」が誕生してきたとき、新しく開かれた浄土宗の未来像がそこにくっきりと見えてくるはずです。

基本をしっかりと踏まえた上でこの応用変化——浄土の宗義宗乗を胸に畳みこんでの新しい教化方式こそが今この聖典をとおして求められるところです。私はここであらためて「念仏聖人」像の新鮮な感触を皆さんの肌でしっかりと受け止めて欲しいとお願いするものであります。

刊行の辞

このたび『浄土宗聖典』全六巻（予定）のうち、浄土宗の所依の経論である『浄土三部経』と『往生論』が収められている第一巻が刊行されることになった。浄土宗教団にとって大変慶ばしいことである。

浄土宗教団に属するものにとって、とくに『浄土三部経』の音読・訓読が、それぞれ読む人、読むテキスト（版本・印刷本）によって、微妙に異なることを見聞しているのは、筆者ひとりではない。多くの方がたが経験されていることと思う。

訓読については、岩波文庫の『浄土三部経』上・下に、客観的に取り扱われているようにみえるが、浄土宗の伝統的読みに比べて異なるところ少なくないのである。音読についても、四声点が付されている『浄土三部経』（版本）であっても、四声点をはっきりと見取って音読していくものも少なく、また読む人によって少しずつ異なるのである。

こうした浄土宗教団における、とくに『浄土三部経』にかかわる音読・訓読の実状を見聞し、これを指摘し嘆かれておられたのが、音韻を中心とした中国語学の権威で、京都市智恵光院前住職である水谷真成先生（元名古屋大学教授・元佛教大学嘱託教授）である。

水谷真成先生は名古屋大学を辞められて昭和五十二年十月から、佛教大学で毎週金曜日にわれわれ（深貝慈孝・岸　一英・髙橋弘次）を相手に『浄土三部経』『観経疏』などを講読してくださった

のである。これが、『浄土三部経』をはじめとする浄土宗にかかわる聖典を、浄土宗定本として出版されなくても、現状では納得されるものの一つとして、出版しようと計画されるに至る契機となったのである。

とくに音読に関しては、昭和五十年浄土宗法式研究所において『浄土三部経』の音読の研究会がはじまり、これに水谷真成先生が加わり指導されたのである。この音読研究会は、当時の故稲岡法純教学局長が一宗の作業として認め、その作業の促進をはかられたのである。今回の『浄土三部経』の音読について、法儀師・花園宗善師が担当されたのは、かかる経緯によるものである。

ついで「三部経音訓読研究会」として、水谷真成先生を中心として研究会がはじめられたのであるが、昭和五十五年に大田秀三教学局長のもとで、「新浄土宗聖典編纂委員会」が設けられ、委員長に故宝田正道師（浄土宗出版室長）が就任、「新浄土宗聖典執筆要項」なるものができて、これにもとづいてそれぞれの担当者が原稿執筆にとりかかったのである。

当初の担当執筆者は、つぎのようである。

『無量壽経』　巻上　水谷真成
『無量壽経』　巻下　髙橋弘次
『観無量壽経』　深貝慈孝
『阿弥陀経』　岸　一英
『往生論』　藤堂恭俊
『梵網菩薩戒経』　宮林昭彦

『佛遺教経』　香川孝雄
『観経疏』　坪井俊映
　　深貝慈孝
　　稲岡誓純
『往生礼讃』　福西賢兆
『選択本願念仏集』　藤堂恭俊
　　（戸松啓真）
『三巻書』　柴田哲彦
『授菩薩戒儀則』　柴田哲彦
『和語燈録』　阿川文正
　　（宝田正道）
『法然上人行状絵図』　国枝利久
　　（明石和成）
『各種偈文』　石田典定

○カッコ印の名前は最初に決まった担当者。

○今回の『浄土三部経』音読は花園宗善師が、科文は牧達雄・伊藤真宏の両師が担当した。

この「新浄土宗聖典編纂委員会」は、完全ではないが一応の編集目的が達せられたので、昭和五十六年一月に解散されたのである。

こうした『浄土宗聖典』を編集していくなかで、読誦用の『浄土三部妙典』（七巻本・荘厳具）が同朋舎出版によって、昭和五十七年に影印刊行された。これには嘉永五年（一八五二）大雲校訂『浄土三部経』（三縁山聚英堂蔵版・大雲点本という）が用いられた。実際に使用したテキストは、東京・照善寺・田丸徳成師の所持本であった。

この読誦用浄土三部経複印刊行については、水谷真成先生が詳しい解説を付している。その解説の「読誦用『浄土三部経』校本刊行略史」には、浄土宗の読誦の歴史とその読誦法が記されている。また「大雲校本『浄土三部経』異本について」、「聚英堂蔵本について」、「大雲について」など、『浄土三部経』の読誦を学習するものにとって、必読の解説であることを付記しておきたい。

さきの「新浄土宗聖典編纂委員会」の編集内容を受けて、昭和六十二年に新しく「新浄土宗聖典刊行委員会」が、牧達雄教学局長のもとに設けられた。委員に藤堂恭俊・真野龍海・宮林昭彦・阿川文正・牧達雄・花園宗善・髙橋弘次らが任命され、委員長に藤堂恭俊師がなられて出版準備に入ったのである。何回か出版編集の検討が重ねられて、数種の組見本なども出され、出版直前に至ったのである。

しかし委員長の藤堂恭俊師が大本山増上寺の御法主に晋董されたことにより、吉田昭炳教学局長のもとに、「浄土宗聖典刊行委員会規程」なるものが制定されて、そこに今日の「浄土宗聖典刊行委員会」と、そのもとに「浄土宗聖典編集委員会」とが設けられた。

浄土宗聖典刊行委員会委員

髙橋　弘次　　真野　龍海　　宮林　昭彦　　阿川　文正

浄土宗聖典編集委員会委員

花園　宗善　牧　達雄　深貝　慈孝
阿川　文正　柴田　哲彦　久米原恒久　春本　秀雄
渡辺　真宏　阿川　正貫　林田　康順　大橋　定敏

前者刊行委員会においては、数回にわたって刊行事務の検討を重ねた。また後者編集委員会においては、印刷に付するための、昼夜にわたる編集・校正などの作業に鋭意つとめていただいた。なお今日の『浄土宗聖典』第一巻の刊行にこぎ着けたのは、小林正道出版室長の熱心な刊行事務の遂行に当たっていただいたことによるものであることを記しておかねばならない。

いずれにせよ、今回の『浄土宗聖典』第一巻の刊行のはこびとなったのは、浄土宗当局をはじめ、当初から編集にかかわり原稿執筆していただいた、担当先生方ならびに浄土宗出版室の方々のお蔭であり、ここに甚深の謝意を表す次第である。また当初から印刷を引き受けられた図書印刷同朋舎に対して、辛抱強く耐えて印刷作業にかかわっていただいたことに、深く謝意を表したい。

最後に、第一巻の編集・刊行にかかわる作業の全般について、全力は尽くしたものの、これで完全だということはないと思う。これから続刊される『浄土宗聖典』第二巻以後についても同じことがいえると考えられる。浄土宗教団の諸賢の温かい見守りのなかに続刊されることを願って刊行のことばとしたい。

平成六年一月二十五日

浄土宗聖典刊行委員会委員長　高橋弘次

浄土宗聖典　第一巻

目次

序　浄土門主　中村康隆……Ⅰ
まえがき　浄土宗宗務総長　成田有恒……Ⅱ
刊行の辞　浄土宗聖典刊行委員長　髙橋弘次……Ⅳ

浄土三部経

佛説無量壽経　巻上……三
佛説無量壽経　巻下……七六
佛説観無量壽経……一三九
佛説阿彌陀経……一九五

浄土三部経書下文

佛説無量壽経　巻上……二一三
佛説無量壽経　巻下……二四九

佛説観無量壽経……二八七
佛説阿彌陀経……三一五
無量壽経優婆提舎願生偈（往生論）……三二五
無量壽経優婆提舎願生偈（往生論）書下文……三五三
解　題
浄土三部経解題……三七五
無量壽経優婆提舎願生偈（往生論）解題……三九六
浄土三部経音読解説……四〇一
参考資料……四〇六
（一）　浄土三部經字音正訛考　音　澂　……四〇六
（二）　刻訓點清濁三部經凡例　大　雲　……四一三

題字　浄土門主　中村康隆　猊下